神戸新聞（夕刊）　2010年（平成22年）9月22日

自立を支える

・ハイチからの報告・

生活再建

被災者の意欲奪う現実

（中）

ハイチの首都ポルトープランスに近いデルマ。滞在したホテルの前に、右腕のない男性がいつも座っていた。道の向こうのバラックに、1月の大地震の被災者らが暮らす。

デルマのスポーツ公園では今、約4万9千人が避難生活を送る。被災者キャンプでは2番目の規模。国連ハイチ安定化派遣団が常駐する。地震の後、殺人5件、レイプ24件が発覚したという。

ハイチは1986年に独裁政権が倒れた後も混乱が続いた。派遣団は、治安回復のため地震前の2004年から駐留している。震災で混迷が深まり、派遣団の人権担当者が批判する。

「政府が策定中の再建計画は、テント住民の移転先を示していない」。仮設住宅の建設は用地の確保が難しく、12万5千戸の計画に対し約3200戸しか建っていない。復興住宅の計画はない。

ハリケーンの襲来を誰もが危ぶむ。「普段の雨でも水が20㌢たまる」とテント暮らしの女性アウグスト・スゼットさん(60)。地震の前は路上で服を売り、娘3人を養ってきた。仕入れ先を失い、教会の支援物資で食べつなぐ。将来について聞くと「神様しか知らない」と漏らした。

◇

まして障害を負った人たちは将来の展望を描けない。地震で4千人以上が腕や脚を切断した。

国際医療援助団体「AMDA」（岡山市）の義肢装具士八尾直毅さん(30)＝相生市＝は、義足や義手を無償提供するため5月にハイチに入った。説明会に患者らが殺到した。「皆、切って縫っただけ。義足に適した切断術ではない」。現状に応じて工夫するしかない。

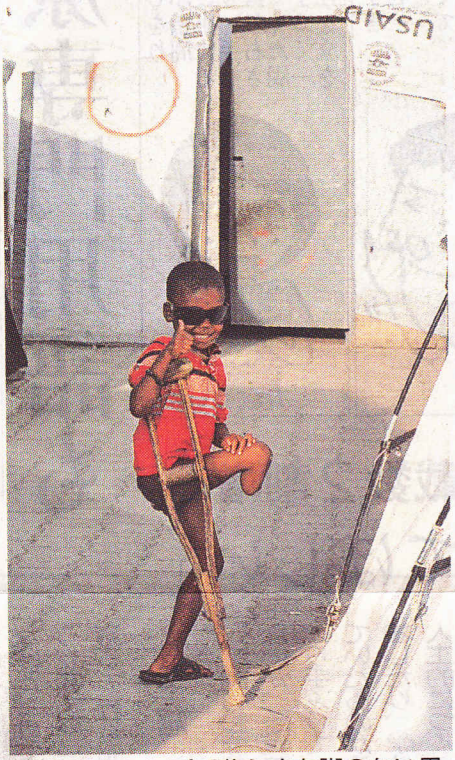
作業場は借りたが、製作を始められずにいる。問題は、部品や機械の調達。近畿義肢製作所（神戸市西区）の在庫品などが8月には届くはずが、税関で足止めに。交渉を重ね、やっと搬入が認められた。プエルトリコで買い付けた研磨機などは、隣国のドミニカ共和国から通関手続きが緩い陸路で持ち込もうと、輸送業者と調整する。

通電時間が短く、発電機の調達も必要になる。「大変な国。一から百までしないと」。9月末にはデルマでの義足製作を始めたい。まずは50人分の提供が目標だ。

◇

ハイチ政府は3月、被災者の自立を阻害し、経済復興の妨げになるとして、食料援助の打ち切りを米政府や国連に要求した。デルマのキャンプも食料の支給が打ち切られた。だが、仕事はなく、被災者らは生活再建の意欲を失いがちだ。自立への道筋は見えない。

（大月美佳）



被災者キャンプで暮らす右脚のない男児。カメラに向かってポーズを決めてくれた＝9月4日、ハイチ、デルマ